様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 １６ 日現在

機関番号：１２６０８
研究種目：挑戦的研究（萌芽）
研究期間：2019～2022
課題番号：１９Ｋ２１７５０

研究課題名（和文）データベース構築による道徳教育モデル校の資源活用といのちの教育プログラムの策定

研究課題名（英文）Developing the program for life and death education by building a database regarding model schools for moral education

研究代表者
弓山　達也（YUMIYAMA, Tatsuya）

東京工業大学・リベラルアーツ研究教育院・教授

研究者番号：４０３１１９９８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　4,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的はいのちの教育に関する①データベースの作成と公開、②その位置づけの変遷の明確化、③隣接する地域・環境・平和・防災等の教育との連携の模索、④より効果的な教育プログラムの策定にある。そのためデータベースに関わる情報の収集と整理、文献研究・現地研究を実施した。その結果、「特別の教科　道徳」教科書のいのちの教育に関する一覧表、感染症に関わる年表、雑誌記事の一覧などを作成・公開した。コロナ禍によって十分に初期の目的が果たされなかったが、いのちの教育と環境教育、平和教育、安全・防災教育等との関連を模索し、水俣病と震災伝承施設に関わるいのちの教育の教材開発を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究では、いのちの教育に関わるデータベース、年表、雑誌記事一覧を論文・資料やウェブサイトを通じて公開した（一部は研究者のみの限定公開）。そしていのちの教育が近年後退していく背景として、安全・防災教育に展開していくプロセスや内在的要因を分析した。同時に本研究では、いのちの教育と、水俣病や原発事故を教材とした環境教育、震災伝承施設訪問を念頭に置いた安全・防災教育、戦争体験インタビュー集の平和教育、ボランティア活動との関わりを検討し、具体的ないのちの教育のプログラム策定に至った。これらはいのちの教育を検討する研究者・実践者の今後の活動に寄与するものであると確信している。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is (1) to create and publish a database on life and death education, (2) to clarify the evolution of the position of the education, (3) to explore the linkage between the education and related field, and (4) to formulate a more effective educational program. In order to realize this purpose, we collected and organized information related to the database of life and death education, and conducted literature and field research. As a result, we created and published a list of life and death education on the moral education textbooks, a chronological table related, and a list of journal articles. Although the initial purpose of this study were not fully fulfilled due to the COVID-19 situation, we developed educational materials for life and death education related to Minamata disease and disaster memorial facilities, seeking to link this education with environmental education and safety and disaster prevention education.

研究分野：宗教学

キーワード：いのちの教育　データベース　スピリチュアリティ　道徳教育

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

文部科学省は 1998 年に教育課程審議会「児童生徒の心に響く道徳教育」の答申を受け、2 年サイクルで道徳教育の推進事業（以下「モデル校事業」と呼ぶ）を展開してきた。特に 2005 年・06 年にはいのちの教育に特化したモデル校 73 校が採択された。文科省のモデル校事業自体は 2010 年に終了するが、これは都道府県にバトンタッチされ、その影響は地方教育行政にも及んだ。しかしこうした取り組みの成果は集約されることなく、モデル校に赴くか教育委員会に請求しない限り、資料は閲覧できず、道徳教育研究・実践双方にとって、これまでのモデル校で開発された教材・教授法を確認できるデータベースの公開が待たれてきた。特に道徳は 2018 年から小学校で、翌年からは中学校で「特別の教科」となり、1958 年に設置されて以来の大改訂となるなか、その充実に向け、先駆ともなるべきモデル校の成果の共有は重要である。

２．研究の目的

以上を研究上の背景とし、本研究の目的は、主に公立小中学校を対象に、いのちの教育をより豊かに実行力あるものとするため、(1)文部科学省「道徳教育モデル校事業」(1998 年～)の紙媒体資料を中心とした関連情報をデータベース化することで道徳教育の共有財産を構築することにある。そしてこれをもとに(2)教育重点領域におけるいのちの教育の位置づけの変遷を明確にし、(3)いのちの教育に隣接する地域・環境・平和・防災等の教育との連携を模索。そしてこれらを前提として(4)より効果的ないのちの教育のプログラムを策定することを本研究は目標としている。

３．研究の方法

本研究は研究目的を達成するため、新規にデータベースを構築・公開し、これに基づきサンプリングと資料収集を行い、聞き取り調査を実施し、プログラムを策定していくものである。具体的には(1)文科省初等中等教育局教育課程課で保管されている、いのちの教育モデル校期間・所在地・重点領域・研究課題名、教材や教授法が記された簡易報告書のデータベースを構築する。そしてこれを用いて、(2)いのちの教育、および同教育に関わる地域教育・環境教育・平和教育・防災教育を主として扱った学校を選定し、資料収集や聞き取り調査を実施する。さらに(3)以上のデータを用いて地域・平和・防災等の教育と連携するいのちの教育のプログラム策定を行う。

しかし 2020 年から始まった新型コロナウイルス感染拡大防止のための緊急事態措置・まん延防止等重点措置（以下「コロナ禍」と略）のため、上記方法は変更を余儀なくされた。特に(2)の資料収集や聞き取り調査調査については、モデル校の研究発表会、授業参観、発表会等が中止となり、開催されてもコロナ禍により、東京からの訪問が制限され、本来実施すべき聞き取り調査ができなかった。しかし本研究の最終的な目標は、いのちの教育とこれに関わる地域教育・環境教育・平和教育・防災教育との架橋をはかることで、より効果的ないのちの教育のプログラムを策定することにあり、これを目指し、文献研究と訪問を許可された現地研究（一部、過去の現地調査を含む。具体的には水俣病や原発事故の学習を中心とした環境教育、東日本大震災後にクローズアップされた安全・防災教育、スペイン風邪禍における文化的対応）にシフトして、これを追究した。

４．研究成果

(1)各年度のまとめ

【2019 年度】　本研究では「特別の教科　道徳」について、2019 年度に入手できる全教科書を収集、そのうち、生命尊重に関わるパートを抜き出し、教材やテーマを抽出し一覧表にし、そのうえで出版社の編集方針、用いられている教材、また死についての言及を取りまとめた。同時に教科書に関する朝日・毎日・読売新聞における当該記事を、新聞記事データベースを用いて整理した。この成果は、共著資料「道徳教科書における「生命尊重」―テーマと教材、そして死の取り扱いについて―」として『いのちの教育』5（2020 年）に掲載されている。

【2020 年度】　上記「研究開始当初の背景」に記したモデル校事業のうち、いのちの教育に特化したモデル校（課題名「命を大切にする心をはぐくむ教育の推進に関する研究」）の実績報告書を整理し、都道府県名・学校名・研究課題名・取組と成果のポイント・理念・教材・具体例・テーマ・小学校高学年教材に関するデータベースを作成、実績報告書 PDF とともにウェブサイト上で公開した（研究者のみに限定）。

また上記「研究の方法」で触れた文献研究と訪問を許可された現地研究へのシフトとして、水俣病を題材としたいのちの教育の教材作りを進め、同時に東日本大震災による原発事故の学習とボランティアに関する考察を行った（後者は共著論文「ボランティアは躓きながら現地をめざす―利他の精神の N 字型進展―」を『宗教と社会貢献』10 (2)、2020 年に掲載）。さらにコロナ禍におけるいのちの教育のあり方を模索するため、感染症と宗教文化との関連をスペイン風邪

禍に探るべく、これも文献調査を実施した。具体的には朝日・毎日・読売新聞の記事データベースを活用してスペイン風邪に関する年表作成に着手した。同時に地方における動向を探るべく、福島県立図書館にて福島民報・福島民友・福島新聞から福島県下のスペイン風邪禍状況を確認し、論文「非宗教者の信仰復興―福島県下の大規模災害を事例として―」を単行本（『宗教信仰復興と現代社会』2022 年）の一章として収録の機会を得た。
【2021 年度】前年度から引き続き、文献研究と現地研究をもって水俣病や原発事故の学習を中心とした地域・環境・防災教育とスペイン風邪禍における文化的対応にシフトして、これを追究してきた。現地調査は次の 3 カ所である。①7 月に福島県田村市・いわき市における震災復興イベントに参加。特に移住者の被災地における役割にフォーカスし、生きる力の涵養の観点から観察を行った。②7 月に福島県立博物館と福島県歴史資料館において資料収集し地域教育や防災教育といのちの教育の関連を探索した。③8 月に新潟水俣病関連施設（新潟水俣病資料館／旧昭和電工／阿賀野側流域）の見学を行い、環境教育といのちの教育との関連を探った。
　前年度からの研究成果と合わせて、水俣病を教材としたいのちの教育の授業開発として共著資料「『苦海浄土』を声に出して読む―水俣病を教材とした「いのちの教育」―」（『いのちの教育 6、2021 年）、スペイン風邪に関する論文「スペイン風邪禍でなぜ宗教行事は催行されたのか」（『宗教研究』95(2)、2021 年）をそれぞれ公開した。また 2022 年 2 月には日本いのちの教育学会と連携して研究大会を開催（テーマは「生きる力の涵養と支え合いのネットワーク」で講演 2 つ、パネルディスカッション 1 つ、ラウンドテーブル 3 つ）、3 月には大田区地域力推進部地域力推進課と共同して平和教育に関する戦争体験談インタビュー集『おおた区民大学じんけんカフェ―平和の尊さを未来へ伝える人になる―』（非公開）を作成した。
【2022 年度】前年度に引き続き、文献研究と訪問を許可された現地研究へのシフトとして、新たに大学院生 4 名とともに調査チームを編制し、主に福島県浜通り地域の震災伝承施設（相馬市伝承鎮魂祈念館、震災遺構浪江町立請戸小学校、東日本大震災・原子力災害伝承館、とみおかアーカイブ・ミュージアム、ふたばいんふぉ、いわき市地域防災交流センター 久之浜・大久ふれあい館、いわき震災伝承みらい館、いわき市ライブいわきミュウじあむ「3.11 いわきの東日本大震災展」）の調査を行い、一部の展示についてはデータベースを作成し、ここからいのちの教育に資する理論的考察と教材研究を行った。具体的な成果は日本宗教学会のパネル発表、日本スピリチュアルケア学会、日本社会学会で発表。これらの発表に基づき、共著論文「震災伝承館といのちの教育―スピリチュアリティの観点から―」が日本いのちの教育学会機関誌『いのちの教育』8 号（2023 年）に論文が掲載されている。
　またいのちの教育と関連して、『日本スピリチュアルケア学会ニュースレター』1-22 号（2009 年 8 月～2020 年 2 月）の総目次を作成し、一般社団法人日本スピリチュアルケア学会に提供。これに基づいて、同学会ではニュースレター掲載の講演や寄稿が整理され、2023 年 6 月より学会ウェブサイト上での公開が開始されている。

(2)研究成果のまとめと今後の課題
　本研究の目的は上記に書いたように①データベースの作成と公開、②いのちの教育の位置づけの変遷の明確化、③いのちの教育に隣接する地域・環境・平和・防災等の教育との連携の模索、④より効果的ないのちの教育のプログラムの策定にある。当初の目的に従って本研究の成果と課題を記していきたい。

①データベースの作成と公開
　本研究では、論文・資料として公開したものとして、次のものがあげられる。(ⅰ)「特別の教科　道徳」の全教科書から「生命尊重」の項目を抜き出し、テーマと教材の一覧表。(ⅱ)朝日・毎日・読売新聞のデータベースを活用してスペイン風邪と宗教行事に関わる年表。(ⅲ)福島民報・福島民友・福島新聞から福島県下のスペイン風邪と宗教教行事に関わる年表。(ⅳ)福島県浜通り地域の震災伝承に関わる 9 施設を調査し、その中でもとみおかアーカイブ・ミュージアムに注目し、宗教文化に関する展示一覧。またウェブサイト公開として(ⅴ)『日本スピリチュアルケア学会ニュースレター』1-22 号（2009 年 8 月～2020 年 2 月）の総目次を作成し、これに基づき、講演や寄稿が順次配信されている。
　特に(ⅰ)については、検定教科書は通常、一般書店では購入できず、教科書販売店での取り扱いになる。教科書をめぐって多くの議論があるものの、市民は教科書自体に簡単に触れることができない。また道徳の中でも生命尊重のパートは、その内容の抽象性ゆえに扱いづらいものと言われている。こうした点を踏まえ、道徳の教科書における生命尊重のパートを網羅的にまとめたことは、いのちの教育を考える上で貴重な作業といえよう。また『日本スピリチュアルケア学会ニュースレター』のデータベース作成、そしてこれに基づく講演や寄稿の公開はいのちの教育だけでなく、日本におけるスピリチュアルケアの黎明期の記録を広く共有する意味でも価値ある作業である。
　一方で、限定公開に留まっているものとして、(ⅵ)いのちの教育に特化したモデル校データベースがあるが、実績報告書 PDF とのリンクを作成し、研究者・教育者の便宜に供することが今後の課題である。

②いのちの教育の位置づけの変遷の明確化

モデル校を訪問し、資料収集や聞き取り調査を行うことで②の目的を達成するはずであったが、コロナ禍により十分に果たすことができなかった。その中でも前掲論文「震災伝承館といのちの教育」ではいのちの教育が安全・防災教育に展開していく背景を分析したものとして特筆される。モデル校事業自体は文科省から各都道府県に引き継がれて裾野が広く、選定された学校の数は数千と言われている。その網羅的把握とその中でのいのちの教育の位置づけの変遷を明確にすることが急がれる。

③いのちの教育に隣接する地域・環境・平和・防災等の教育との連携の模索

本研究では、いのちの教育と、水俣病や原発事故を教材とした環境教育、震災伝承施設訪問を念頭に置いた安全・防災教育、戦争体験インタビュー集の平和教育、ボランティア活動との関わりを検討し、上記の成果をあげた。また感染症と宗教文化との関連を、スペイン風邪禍に題材を求め、そこから文化的レジリエンスを探る成果を発表した。本研究期間中には、こうしたいのちの教育と関連教育との関係を体系的に考察することはできなかったが、今後、事例研究を重ねつつ、その体系化を課題としたい。

④より効果的ないのちの教育のプログラムの策定

本研究では具体的ないのちの教育のプログラム策定に至ったものとして前掲の「『苦海浄土』を声に出して読む」と「震災伝承館といのちの教育」がある。

「『苦海浄土』を声に出して読む」では、その目的はいのちの教育の教材としての石牟礼道子『苦海浄土』の可能性、またスピリチュアリティの次元からいのちの尊さを理解できるいのちの教育の可能性を探ることとした。水俣病被害者を語り手とする同書を音読教材として検討すると、方言や障害ゆえのたどたどしい口調で書かれていることによる「読みづらさ」が他者や登場人物の生活感を想起させる構造になっていることに気づく。そしてこれが読者を当事者の追体験へと向かわせていることが判る。さらに文学と現実の交錯する叙述スタイルの本書は、エピソードのモデルとなった事実について、読み手の関心をかき立てる。ここから「四大公害」の一つという事実の次元、当事者のリアリティの次元、その背景にある死や魂や神々・仏など、現世を超えた世界観の次元など、多元的なアプローチを要請する。当事者の生きる意味を読者に問う本書は、いのちの尊さを単なる知識や心情や態度の次元だけなく、スピリチュアリティの次元から理解することを促すのである。いのちの教育は『苦海浄土』を得て、より豊かに、深化を遂げるに違いなかろう。

「震災伝承館といのちの教育」では、いのちの教育が後退していく背景に、現世中心・合理的ないのち観、死や不条理を避ける傾向が強い教育現場、生からいのちをとらえようとする近藤理論があったことを指摘し、それゆえいのちの教育が「いのちとは何か」というスピリチュアリティの次元からの問いの深化に向かうよりも、生命を守る知識や行動の習得の安全・防災教育に道を譲ることになったことを明らかにした。さらにこの論文では、東日本大震災に関わる震災伝承施設にいのちの教育の教材を求め、授業を受ける児童生徒が、その人生の中で危機にあって生きる意味を見出し、危機を乗り越えていく参照軸として、垂直軸（超越者とのつながり）とも水平軸（他者とのつながり）とも異なる「斜め上からの視点」に自然・宇宙、家族・先祖、地元・故郷といったキーワードを配置し、死や不条理にも対応できるいのちの教育の実践的モデルを構築した。

本研究によって、多くの基礎的資料の収集・整理が可能になり、これらを公開していくことで、今後、いのちの教育の具体的なプログラム策定に寄与するものと確信している。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計5件（うち査読付論文　5件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 弓山達也・河田純一・中塚豊・福井敬・渡邉龍彦	４．巻 6(1)
２．論文標題 『苦海浄土』を声に出して読む―水俣病を教材とした「いのちの教育」―	５．発行年 2021年
３．雑誌名 いのちの教育	６．最初と最後の頁 66-75
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 弓山達也	４．巻 95(2)
２．論文標題 スペイン風邪禍でなぜ宗教行事は催行されたのか	５．発行年 2021年
３．雑誌名 宗教研究	６．最初と最後の頁 171-196
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20716/rsjars.95.2_171	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 弓山達也・青木繁・市村知輝・太田龍之介	４．巻 10(2)
２．論文標題 ボランティアは躓きながら現地をめざす ： 利他の精神のN字型進展	５．発行年 2020年
３．雑誌名 宗教と社会貢献	６．最初と最後の頁 27-54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18910/77219	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 藤原有紗・弓山達也	４．巻 6
２．論文標題 道徳教科書における「生命尊重」―テーマと教材、そして死の取り扱いについて―	５．発行年 2020年
３．雑誌名 いのちの教育	６．最初と最後の頁 36-50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 弓山達也・青木繁・小高絢子・谷山昌子・道蔦汐里	4．巻 8
2．論文標題 スピリチュアリティの観点からとらえたいのちの教育―震災伝承施設を教材として―	5．発行年 2023年
3．雑誌名 いのちの教育	6．最初と最後の頁 35-47
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計9件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 弓山達也
2．発表標題 スペイン風邪禍（1918-20）における福島県下の宗教行事.
3．学会等名 日本宗教学会第80回学術大会
4．発表年 2021年

1．発表者名 弓山達也
2．発表標題 スペイン風邪禍でなぜ宗教行事は催行されたのか
3．学会等名 「宗教と社会」学会第29回学術大会
4．発表年 2021年

1．発表者名 弓山達也
2．発表標題 問題提起：生きる力の涵養と支え合いのネットワーク
3．学会等名 日本いのちの教育学会第23回研究大会
4．発表年 2021年

１．発表者名 弓山達也
２．発表標題 ボランティア学生のエスノグラフィー―利他の精神をどう「書く」か―
３．学会等名 「宗教と社会」学会
４．発表年 2020年

１．発表者名 弓山達也
２．発表標題 国難と信仰―宗教が宗教であるために―
３．学会等名 神道国際学会
４．発表年 2020年

１．発表者名 弓山達也
２．発表標題 特別の教科『道徳』の教科書に「命」はどう描かれているか
３．学会等名 日本宗教学会
４．発表年 2020年

１．発表者名 弓山達也
２．発表標題 問題提起―震災伝承の宗教性―
３．学会等名 日本宗教学会
４．発表年 2022年

１．発表者名 弓山達也・共著者：青木繁・小高絢子・谷山昌子・道蔦汐里
２．発表標題 震災伝承館といのちの教育―スピリチュアリティの観点から―
３．学会等名 日本スピリチュアルケア学会
４．発表年 2022年

１．発表者名 弓山達也
２．発表標題 いのちの教育はなぜ後退したか―死、スピリチュアリティ、価値観の観点から―
３．学会等名 日本社会学会
４．発表年 2022年

〔図書〕　計1件

１．著者名 大田区地域力推進部地域力推進課	４．発行年 2022年
２．出版社 大田区地域力推進部地域力推進課	５．総ページ数 115
３．書名 おおた区民大学じんけんカフェ　平和の尊さを未来へ伝える人になる	

〔産業財産権〕

〔その他〕

日本いのちの教育学会第23回研究大会 http://yumiyama.my.coocan.jp/jalde23.html

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関